

会 議 録

1 会議名

令和6年度第1回上越市総合教育会議

2 議題（公開・非公開の別）

上越市における部活動の地域展開（公開）

3 開催日時

令和7年2月3日（月）午後1時30分から3時00分まで

4 開催場所

上越市役所木田第一庁舎4階 401会議室

5 出席者（敬称略）

・構 成 員：中川上越市長

上越市教育委員会 早川教育長、大谷教育長職務代理、小林委員、
金子委員、鈴木委員

・市長部局：池田理事、笹川総務部長、五十嵐総務部参事、唐澤総務課参事、石黒総合
政策課長、佐藤地域政策課長、渡邊文化振興課長

・事 務 局：白石教育部長、中西歴史文化指導監、瀧本教育総務課長、小池教育総務課
参事、市川地域クラブ活動推進室長、小林学校教育課長、福山社会教育課
長、石田スポーツ推進課長、小酒井教育総務課副課長、岩野教育総務課副
課長、秋山教育総務課企画係長、藤井教育総務課主任

6 発言の内容（要旨）

（1）開会

【白石教育部長】

本日はご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。ただ今から、上越市総合教育会議を開会いたします。私は、本日の進行を務めます、教育部長の白石です。よろしくお願いいたします。

本日は、会議の構成員であります市長、教育長及び教育委員の皆様から出席いただいております。関係職員につきましては、出席者名簿をご確認ください。それでは、お手元に配布いたしました次第に沿って進めさせていただきます。

はじめに、中川市長から挨拶をお願いいたします。

(2) 市長あいさつ

【中川市長】

教育委員の皆様におかれましては、日頃から市の教育行政の推進にご尽力いただくとともに、市政全般にご協力いただいておりますことに、心から感謝申し上げます。

平成 27 年の教育委員会制度の改正に伴い設置した総合教育会議は、今回で 10 回目の開催となります。この間、総合教育会議においては、教育の課題や目指す姿を共有して教育行政を推進するため、教育大綱の策定を始めとする教育の重点施策について意見交換をしてまいりました。

本日の会議では、「上越市における部活動の地域展開」をテーマとして、意見交換をさせていただきます。

現在、少子化が進む中、将来にわたり子どもたちがスポーツ・文化芸術活動に継続して親しむ機会を確保していくことが求められております。こうした中、令和 4 年 12 月に国からガイドラインが示され、全国で部活動の地域移行の取組が進められているところであります。

当市では、この間、小中学生が参加できる活動を紹介する地域クラブフェアの開催や、指導者を養成する研修会の実施等の取組を行いながら、スポーツや文化芸術活動の関係者との意見交換を重ね、昨年の 12 月には、「上越市地域クラブ活動整備方針」を策定したところであります。

今後は、この方針に基づいて、地域における子どもたちの活動環境の充実を図る取組を進めていくこととしており、この取組を力強く進めていく上では、市民の皆様と目的や理念を共有して、それぞれができることに取り組んでいただくことが大切であると考えております。本日は、教育委員の皆様から忌憚のないご意見をお聞きしたいと存じます。

結びに、本日の会議がこれからの教育行政の推進に向けて、有意義なものとなりますよう重ねてお願い申し上げ、開会の挨拶といたします。

(3) 協議

【白石教育部長】

それでは、協議に移ります。

ここからは、上越市総合教育会議運営要領第 5 条の規定に基づき、中川市長に進行をお願いいたします。

【中川市長】

それでは、協議に入らせていただきます。時間は限られていますが、有意義な会となりますように、皆様のご協力をお願いいたします。

本日の協議題は、「上越市における部活動の地域展開について」であります。協議題について説明を受けた後、意見交換を行う順で進めてまいります。上越市における部活動の地域展開について、事務局から説明してください。

【地域クラブ活動推進室長】

地域クラブ活動推進室の市川です。「上越市における部活動の地域展開」について、資料に沿って説明します。

目次をご覧ください。大きく2つの説明をします。まず、「部活動の地域展開を取り巻く状況」、その後、「上越市の取組の方向と考え方」を説明いたします。

初めに、部活動の地域展開を取り巻く状況の国の動きです。令和2年9月に文部科学省から「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」の通知が出され、具体的方策として「休日の部活動の段階的な地域移行」等が示されました。

そして、令和4年12月にスポーツ庁及び文化庁が「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」として、地域におけるスポーツ・文化芸術環境の整備の進め方等を示しています。当市においてもこのガイドラインに則り、取組を進めています。

現在、国においては、令和6年8月に有識者会議を設置して今後の方向性や総合的な方策を検討しています。この会議のとりまとめは今年の春頃とされていますが、昨年12月に「中間とりまとめ」が公表されています。

以下5ページから7ページにこの「中間とりまとめ」の国の資料を転載しており、右側に説明のための目印をつけています。

5ページの「改革の理念及び基本的な考え方等について」において、「地域クラブ活動においては、新たな価値を創出することが重要」であること、地域クラブ活動の定義・要件や認定主体、認定方法等を国として示す必要があること、理念や地域クラブ活動の在り方等をよりの確に表すため、「地域移行」という名称は「地域展開」に変更することといった考えが示されています。

そして、改革を進めるに当たっての基本的な考え方として、理念の共有の必要性が強調されています。名称については、当市においてもこの見解を踏まえ「地域展開」の名称を用いてまいります。また、「新たな価値、定義・要件、理念共有」については上越

市の方針の検討過程においても議論され、重視してきているところであり、同じ方向性にあるものと受け止めています。

6 ページでは「今後の改革の方向性」として休日の進め方、平日の進め方、次期改革期間等の考え方が示されています。7 ページについては資料をご覧ください。

続いて 8、9 ページは全国の地域連携・地域移行の動向です。運動部活動の調査結果であり、8 ページは休日の動向、9 ページが平日の動向です。

まず、休日については、文部科学省が令和 5 年から令和 7 年までを「改革推進期間」と位置づけ、休日の部活動について、合同部活動や部活動指導員の配置により地域と連携することや、学校外の多様な地域団体が主体となる地域クラブ活動へ移行することについて、地域の実情等に応じて可能な限り早期の実現を目指すよう、各自治体に求めています。

令和 7 年度までには、運動部活動の 54% が地域連携または地域移行を予定しており、37% が地域移行を予定する状況です。当市においては令和 8 年度から休日の部活動を行わない方針でありますので、この令和 7 年の円グラフのオレンジ色の部分、37% に含まれます。

9 ページは運動部活動の「平日」の動向です。休日に比べて、地域連携や地域移行を予定する割合は低くなっています。令和 7 年度までには、運動部活動の 31% が地域連携または地域移行を予定し、13% が地域移行を予定しています。

上越市は「平日はできるところから」としており、令和 7 年度末時点では、地域連携又は地域移行は一部に止まります。

他自治体の事例として、静岡県掛川市の取組を紹介します。掛川市においては、国の実行会議の下に置かれるワーキンググループにおいて取組状況を発表しています。その際の資料の一部を転載させていただいています。掛川市の部活動改革ロードマップとして、令和 3 年度からの取組が示されており、令和 8 年度には平日と休日の部活動を廃止とされています。

また 11 ページの資料では、「学校教育から生涯学習へ」「地域全体のウェルビーイング」といった考え方が示されています。

掛川市においては、以前から「部活動の地域展開」という表現を使ってきました。

令和 8 年夏に部活動を廃止し、それに替えて「様々な地域団体が運営するかけがえ地域クラブ」をスタートさせるとのことです。

上越市の方針策定においては、こうした他市の事例を参考にしました。掛川市は特に

情報発信を丁寧にしており、大いに見習ってまいりたいと考えています。

部活動の地域展開を取り巻く状況の 3 つ目は、上越市における部活動の現状です。13 ページの資料は、運動部活動中心のデータとなります。生徒数、運動部員数、運動部活動数の推移ですが、平成 25 年から令和 4 年度までの 9 年間で、生徒数は約 18.7% 減少、運動部員数は約 25% 減少しています。

教職員の献身的な支えにより成り立ってきた部活動ですが、単独校でチームが組めない、教職員数の減少で専門的な指導ができる顧問が少ないなどの問題に直面しています。

14 ページは今後の中学校生徒数の推移見込みです。令和 6 年度から令和 18 年度の 12 年の間に、生徒数はさらに約 37.6% 減少することが見込まれることから、問題がさらに深刻化することが想像できます。

一方で、子どもたちのニーズが多様であることは、中学 1 年生及び 2 年生を対象にしたアンケートからもわかります。「土日祝日に学校ではなく地域で実施されていたら、参加に興味があるスポーツ・文化活動はありますか」という設問で、子どもたちが、部活動にある種目に限らず、様々な種目・分野に興味を示していることが分かります。

16 ページからは「上越市の取組の方向と考え方」の説明です。上越市における地域クラブ活動の在り方、考え方をまとめて、それを関係する皆様と共有するための上越市地域クラブ活動整備方針を昨年 12 月に策定しました。内容は、基本的な考え方や取組の方向等を示した「整備方針」、市の地域クラブ活動の在り方を示した「ガイドライン」、上越市地域クラブを公募、認定する「認定制度」で構成されています。

資料では上越市地域クラブ活動のポイントとして 3 点を挙げています。

一つ目は、「行政が新たなクラブを創設するものではなく、様々な成り立ちのクラブ活動」であることです。学校の部活動と地域の活動は異なるものであり、地域の活動を充実させる上では、その特徴である「多様性」「主体性」を活かすことが重要です。行政としても、関係する皆様の主体的な取組をしっかりと支援してまいります。想定されるパターンとしては、【既存クラブ型】【民間事業者型】【学校部活動由来型】【新たなスポーツ・文化環境型】等を例示しています。公募、認定を行うことにより多様な活動の参加を促し、ホームページ等で団体を紹介し、子どもたちとのマッチングを図ります。

二つ目は地域クラブの対象です。主な対象は中学生ですが、中学生が小学生と一緒にする活動や大人と一緒にする活動など、中学生以外の世代と共同で行う活動も含みま

す。部活動とは異なる地域で行う活動であり、生涯学習・生涯スポーツ振興の視点からこの対象としています。

三つめは、まずは「休日」からの地域展開としていることです。上越市の状況を見ると地域によって条件は異なりますが、特に平日は指導者の確保や、子どもたちの移動手段等の課題が多いものと考えられます。部活動を地域に移すのではなく、地域の活動として充実させていくという趣旨から、まずは、「できるところから」という意識を共有して、できるだけ多くの主体者の参加を得ながら進めたいと考えています。一方、子どもたちや保護者にも、休日の過ごし方を改めて考える機会を持っていただけたらと思います。

17 ページでは、今後の取組スケジュールのイメージを休日と平日に分けて載せています。グリーンで示した部活動については、令和 7 年度までに休日の活動を段階的に縮小させ、令和 8 年度からは行いません。令和 8 年度以降、休日は地域の多様な活動への参加となります。地域クラブはその選択肢の一つとなります。平日については休日の進捗状況等を検証しできるところから取り組むこととしています。

18 ページは、上越市地域クラブの目的、理念です。直接の目的は、ページの中ほどにあります、「少子化の中でも将来にわたり、子どもたちが多様なスポーツ・文化芸術活動に親しむことができる機会を確保する」ことです。

一方で、多くの関係者が主体者として加わる、一体感のある取組としていくために、この取組の意義を共有することが重要なポイントであると考えています。地域クラブ活動推進委員会においても議論いただき、目指すありたい姿と活動理念を定めています。取組の先にある、目指す姿は、「子どもも大人も身近にスポーツや文化芸術に親しみ、交流し、つながるまち」すなわちこの取組は「まちづくり」でもあるということです。

上越市地域クラブ活動は、子どもの主体的で多様な「やってみたい」を支えるものであり、支える人にとってもウェルビーイングを高める活動です。

この主体性を大切に、多様性を尊重する、そして、まちづくりに向かうという理念は、上越市教育大綱「わくわくを未来へ」の趣旨に沿うものであります。

19 ページは市内における活動の事例です。

市内の音楽愛好家の方々により、昨年秋に小学生から中学生を対象として楽しく音楽活動を行うジュニア音楽クラブが活動を始めています。その右のU12 バasketボール教室は、小学 4 年生から 6 年生を対象とする活動ではありますが、地域と学校の

連携により、主体的に取り組まれる活動であり、今後の地域クラブ活動に繋がる取組として取り上げました。

板倉中学校の事例は、「平日もできるところから」の事例です。地域に平日も含め生徒のニーズに応えるクラブ活動があることから、部活動の見直しができたという事例です。

その下のチラシは、昨年度から6回を数え、おなじみとなった地域クラブフェアです。昨年12月のフェアにも多様な分野種目の団体から参加いただきました。

21ページには、地域クラブフェアを始めとする多様な活動の写真を載せています。上越市らしい、多様な子どもたちの「やってみたい」を支える活動を展開できたと思います。

以上で「上越市における部活動の地域展開について」の話題提供とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

【中川市長】

では、説明のありました上越市における部活動の地域展開について、教育委員の皆様方の忌憚のないご意見、ご感想をお聞かせいただきたいと思います。事務局の説明に対する質問も含め、いかがでしょうか。

【大谷委員】

地域クラブ活動への移行は国の方針であり、進めざるを得ない状況ではあると思いますが、まだ問題があるのではないかと考えております。

決して後ろ向きな意見ではありませんが、継続的という言葉が何か所か出てきます。現状において、地域クラブの指導者の方々はボランティアで指導していることがほとんどだと思います。ボランティアだけで継続することはとても難しい話であり、この指導者の問題をまず解決しなければ、継続するということができないのではないかと考えています。

また、先ほどの説明の中で多様性というキーワードが出てきました。休日に部活動をさせたい保護者、休日は休ませたい保護者、また部活動が苦手だったり馴染めなかったりする子どもがいるという意味で多様性というキーワードを用いていると思いますが、子どもたちが社会に出た時に、この部活動に対する考えが通用するのかどうかということが心配であり、そこは多様性という言葉で括ってはいけないのではないかと考えます。

1つのルールがある活動の中で、多様性を認めるということではありますが、多様

性の意味をはき違えてはいけないのではないかと考えます。

そして、最も重要なことは子どもたちの自主的な声であると思いますが、この議論の中には子どもたちの声が少ない印象を受けます。子どもたちのやりたいという気持ちの受け皿を作るということが一番大切なことであって、もう少し議論が必要なのではないでしょうか。

【市長】

承知しました。他に意見はありませんか。

【小林委員】

大谷委員から、子どもたちの声をよく聞いて、それを尊重するという意見がありました。これまでの部活動の教育的な価値は非常に高く、スポーツや文化芸術活動の能力だけではなく、社会性の育成においても大きな成果を生み出してきたのは、周知の事実です。

一方で、部活動が非常に脆弱な制度の中で、これまで成り立ってきたこともご理解いただきたいと思います。例えば、学習指導要領において、部活動は教育課程の中に含まれていません。法的には、部活動の実施は学校の裁量にゆだねられていますが、ほとんどの学校が活動に取り組んできました。

また、学習指導要領上の教育課程に含まれないため、教職員の養成段階で部活動の指導については、授業で指導されていません。ですから、教職員は知識のない状態あるいは自分の経験則の中だけで、部活動を指導しているということになります。

教職員の異動は部活動を基準にして行われているわけではありません。教科を基準にして行われるものであるため、例えば野球部の顧問が異動となった際に、野球部の顧問が補充できるかというところを決してそうではありません。多くの教職員が、制度外のところで取り組んでいるということをご理解いただきたいと思います。教職員が部活動にやりがいを感じ、継続できてきた部分もありますが、今の部活動は持続可能な状態にはなっていないと思います。

また、地域展開は必要だとは思っているものの、これまで地域移行については戦後に何度か試みられてきたことであり、ほとんど成功していないということを留意しなければなりません。

例えば、1960年代はスポーツ少年団が盛んに各地域の中で展開されましたが、上手くいきませんでした。1980年代は教育の自由化の中で、地域社会への移行が目指されましたが、それも中途半端に終わってしまっています。1990年代には、中央教育審議

会で、部活動を地域社会にゆだねることが適切であると唱えられたにもかかわらずそれも上手くいきませんでした。2000年代の保健体育審議会の答申でも、総合型地域クラブや地域スポーツクラブの政策構想が示されていましたが上手くいきませんでした。

したがって、なぜ成功しなかったのかということをよく鑑みないと、今回も同じことが起きてしまうのではないかと懸念します。

私もなぜ上手くいかなかったのかと考えてみると、学校が部活動を手放すことに抵抗感を示したからだと推測します。特に非行問題が顕著になった1980年代には、学校が子どもたち守るために部活動を行うという意識さえありました。

先ほどの事務局の説明の中に、理念の共有という説明がありましたが、何のために地域展開をしていくのかということ、子どもたちはもちろん学校、教職員、保護者、地域やクラブの方々と共有していく必要があり、共有していくためには、議論と話し合いと意見聴取を粘り強くやっていく必要があると考えます。以上です。

【市長】

お二人の委員から意見がありましたが、その他いかがでしょうか。

【鈴木委員】

私も小中学生の子どもがいる現役の保護者です。上越市地域クラブ活動推進委員会に委員として参加していますが、やはり地域展開という言葉に変わっても部活動に移行するというイメージが強いと感じています。

また、放課後の居場所づくりというのは上越市でも課題になっていると思いますが、家に帰った後に行く場所がない、どこで遊べばいいのかという意見を実際に部活動を引退した中学生から言われたことがあります。公園で遊んでいたら、小さい子どもが優先だと地域の方に言われ、遊びに来た子どもたちに譲るという状況があると聞きます。学校では後輩たちが部活動をやっているから、体を動かさない。どこか体を動かす場所を探してもなかなか見つからないという現状があります。例えば、直江津東中学校区で言えば、カルチャーセンターやリージョンプラザ等、中学生が自分で行ける場所があります。そういった場所に地域の方々が入り活動できれば、子どもたちの見守りもでき、縦の繋がりが生まれるのではないかと思います。一方で、他の学校でスクールバスを利用する子どもたちは、友達の家遊びに行くのも親の送迎が必要だという話も聞きますので、地域差が出てくる問題だと感じています。以上です。

【金子委員】

今の中学生や小学生の保護者は、おそらく、毎日休みなく部活動をやってきた世代の

方が多いと思います。その中で身についたものやイメージというのは、なかなかこの説明を聞いても取り払うことが難しいものであると感じています。

地域展開という考えを広げられず、地域移行という考え方から離れられないということを保護者の方々から話を聞く中で耳にするのは、やはり今頑張ってる子どもたちがどうなるのかと心配する声です。

この地域展開に関して、場所やクラブを一から作っていくという楽しみや面白さ、そこに地域の色や個性が出たりする楽しさもあると思うのですが、一方で大会で活躍したい、コンクールに出たい、部活動を極めたいという子どもたちの気持ちが置き去りにされている現状もあります。

また、部活動の地域展開において、送迎問題はやはり大変な問題だと認識しています。子どもたちが自分で、好きなときに通える場所というものを作っていく必要があると思います。

【市長】

ありがとうございます。早川教育長お願いします。

【早川教育長】

教育委員会の早川です。

委員の皆様から様々なご意見いただきましてありがとうございました。

私も現場の経験者として、部活動の地域展開に関して様々な想いを持っているのですが、やはり最初に地域移行の話があった時に、個人的にも移行という言葉が良くないのではないかと訴え続けてきました。移行というと他のところに引っ越しさせるイメージがあります。部活動の地域展開は移行ではなくて、新設するもの、つまりスクラップアンドビルドという考え方にしないと理解が得られないだろうと考えておりました。

スクラップアンドビルドも決して教職員の働き方改革を中心とするものではありません。上越市も合併当時の中学生の人数と比較すると約 1,700 人、26.5%減っていることから、当時と同じ状況で学校の活動の存続ができていない状態です。ですから、学校の部活動は一度スクラップすることを考えないと持続が難しいだろうと考えます。

その上で、新しい地域の活動をビルド、新設するというのを伝えてきたつもりですが、なかなか70、80年部活動が続いてきた中で、部活動は学校で教職員が行うものという意識を変えるのは非常に困難でした。

3年目になってもまだまだ十分に周知されているとは思っていません。

地域クラブフェアや指導者の講習会を実施し、様々な働きかけを行いますが、まだま

だ学校から部活動がなくなることについて、具体的なイメージが持てないのは、私は事実だと思っています。

先ほど小林委員のお話もありましたが、教職員の中で部活動が若い子どもたちのエネルギーを消化させる良い機会でしたし、ある時期は生徒指導において、子どもの管理に部活動が有益と考える時代もありました。

しかし、現在の社会において、なかなかそれを前面に出しながら部活動を続けていくということは、難しくなってくると思っています。

子どもを中心に考えた時に、継続が厳しくなってきた学校の部活動に代わる、子どもの活躍の場や居場所を地域でどう確保していくかということは教職員だけではなくて、社会全体で考えていかなければいけません。

もちろん、中心は子どもですが、環境整備は子どもだけでできるものではありませんし、その整備は大人の責務だと思っていますので、社会全体でぜひ考えていってほしいと思います。

教育委員会としても、子どもの活動の場所を何らかの形で作っていきたいと考えていることをご理解いただきたいと思います。

【市長】

小林委員お願いします。

【小林委員】

今の教育長のお話を受けて、部活動を今までと同じ方法で続けていくことは、やはり現実的ではないという話の一例をあげたいと思います。

まず、中学校の教職員の授業の空き時間は1日1時間か2時間です。その1時間から2時間の空き時間に加え放課後の時間で、授業の準備や、子どもたちの悩み相談、進路相談等の業務を行いますが、部活動の有無にかかわらず、勤務時間内にそれらの業務を完了させるのは、難しいのが現状です。まずはその状況を解決しない限り、採用段階で、教職員になりたいという思う学生が諦めてしまいますので、それを防ぐ必要があるということを感じています。

そして、子どもたちを中心に議論をしていくことが大切です。小規模の学校ですと、部活動が2から3つのところが多く、部活動がカバーしきれないところに子どもたちは興味関心を持ち、機会があればチャレンジしたいと思っています。

その環境を整えてあげるのが、私たち大人の役割だと思いますので、部活動の延長ではなくて、全く新しい環境を子どもたちの将来のために、構成していければ良い

と思っています。

一方で、地域の子どもは地域で育てるということを、随分前から上越市は唱えており、青少年育成会議や学校運営協議会、コミュニティスクールの制度の中で、具体的な努力として積み重ねられてきました。地域展開はまさしく、地域の中で子どもの個性を伸ばし育成していくという営みを具体的に展開させる、地域にとってもチャンスであると思っています。

チャンスというのは、子どもたちに関わりながら大人たちが協力関係を結んでいく、新たな人間関係を構築していくことであり、地域の中の信頼関係や新たなネットワークが張り巡らされて、1つの社会的な財産となります。これをソーシャルキャピタルと言っています。このソーシャルキャピタルが高まっていくと、様々な刷新が地域の中から巻き起こり、地域づくりにも大きく寄与して行くのではないかと考えます。

幅広い観点から地域展開を捉えて欲しいと思います。以上です。

【金子委員】

小林委員のお話から、地域クラブを部活動から切り離して考えたときに、「地域で行う」という視点で見ると、期待も大きいところがあると思います。

説明の中に中学生以外の世代と共同で行う活動も含む。という言葉がありました。違う世代との交流や経験した場所が、子どもたちの居場所になることも考えられます。

様々な家庭のお話を伺う中で、子どもの居場所やイベントがあると分かっているにもかかわらずそこに子どもを連れていけない事情がある家庭もあることが分かります。地域クラブフェアも様々な体験ができる素晴らしい企画がなされていますが、ぜひこれを平日に、可能であれば学校の教育の中で経験させてあげたいと思っています。週末に行けない子どもたちに対して、居場所があるということを少しでも伝えていけたらと思います。

また、居場所ができるということは、子どもたちが成長した後も戻ってくることが出来る場所ができるということであり、上越市にとっても子どもたちにとっても期待があることだと感じています。

【市長】

ありがとうございました。私からも1つよろしいでしょうか。
資料の17ページをご覧ください。上越市は令和7年度で休日の部活動をやめる一方で、平日の部活動をいつやめるかということとは示していません。

ただし、実情として教職員が部活動を続けることはできないというのが実態です。

我々とする、金子委員や鈴木委員がおっしゃったように、教育委員会から離れたと

ところで、子どもの居場所づくりを考えるというテーマが与えられたものだと、私は感じています。

したがって、様々な考え方があると思いますが、地域や経済面によって、非常に差が出てくると考えます。住む場所によっては、もしかしたら地域クラブフェアで紹介されるところに行けない方がいるかもしれないし、お金がなければ参加ができないかもしれないということが考えられます。

誰が、責任を持って子どもの居場所を提供していくのかという問題だと私は思っています。もちろん教育委員会は今まで部活動をやってきたので、これをどのように子どもの居場所づくりに繋げていくかということを実行責任を持って実施する必要がありますが、人口が減っていく中で、子どもたちへのサービスをどのように、誰が担っていくのかという問題は、転換点に来ているのではないかと考えています。

子どもたちの居場所を作るために、大人たちがどのように協力するのか、誰が支援するのかということの話し合いを、子どもたちの明るい未来ために進めていけたらと考えております。

【早川教育長】

市長から、子どもの居場所やその仕組みをどう作っていくかという話がありましたが、部活動の地域展開においてはゴールをどこに置くかということが非常に重要になってくると思います。

学校の部活動を地域に展開することはあくまで手段ですが、その先にあるのは、地域における子どもの居場所や活躍の場所をしっかりと保障することであり、これがゴールです。そしてその先にあるのは、大人が関わるまちづくりや地域おこしであり、このような将来構想もしっかりと見据えた上で、部活動の地域展開を考えていくことが大切であると考えております。

【小林委員】

市長の言う、どこで誰がどのように子どもたちを支えていくかということは、長いスパンで解決していく必要があると思います。

地域クラブフェアでは、様々な団体が参加しており、それぞれの団体を主催する方々は貴重な人材であることはもちろんですし、教職員も兼職兼業の手続きをとりながら、自分の住んでいる地域の近くで、学校とは関わらずに活動に参加することもできます。過渡的には、近隣の学校が集まって活動する合同部活動に教職員や専門家が協力するという方法もあるとは思いますが、長い目で見ると持続可能な状態ではないと思いま

す。

日本の部活動が、60 年から 70 年かけて現在の状態に至り、大きな成果を残していますが、ヨーロッパの各国を見ると、部活動というものはなく地域の中のクラブが存在します。

ドイツ、デンマーク、フィンランド、ノルウェーやスウェーデン等のスポーツが盛んな国々においては、地域の中のボランティアや専門家を公の機関が支えています。日本でいうと、社会教育の範疇に入ることと思いますが、60 年 70 年、100 年近くかけて、その人材も育成しながら、成り立ってきたわけです。

今が転換点にあるため、様々なことが未整備の状態です。スタートせざるを得ないと思うのですが、長い目で見ていくということは、保護者や地域の関係団体の方々と意見交換をしながら、子どもたちのためにどのようにやっていくのかということをよく議論し、丁寧に進めていくことであると考えます。

その時に子どもを中心に置くという考えをまずは共有しながら、スタートしていかなければならないと思います。

何もかも 100% 上手くいく状態で、スタートできないということを前提に置きながら、まずは動いてみるということを大切にしていかなければいけません。

【大谷委員】

先ほど教育長の話の中でスクラップアンドビルドという言葉がありました。休日の地域展開からスタートということで、緩やかなスタートを考えられていると思うのですが、最終的に、子どもの人口減少を見るとすべての部活動を廃止しなければ、教職員の負担面を見ても成り立たなくなっていることが分かりました。また、放課後の居場所ということで活動に参加できない子どもたちが、間違った方向に進まないような形での居場所を作るということも、必要になってくると思います。

そうしたときに、例えば地域クラブへの展開に加えて、種目ごとに市内でいくつかの公設チームを作り、市の予算で指導者を雇い、そのチーム同士で交流戦をするという案も考えられます。

また、私個人として、部活動から学んだことが 4 つあります。

まず 1 つ目は競うことです。下手であっても真剣に同じ目標に向かって競い合うということは、おそらく中学校の 2 年半と高校の 2 年半の 5 年間しかなかったと推測します。そこから先、大学で同じように部活動を行うには上達するしかなく、それは限られた人しかできないことでした。真剣に競うという経験も、人生において経験して欲し

いというのが1つです。

2 つ目は部活動の先輩後輩の関係です。理不尽なこともあります。社会に出るにあたり先輩後輩との関係を学んできているかどうかとうことは、重要だと感じています。

3 つ目ですが、先ほど、資料では地域クラブは引退がないことが良いことだというようにも書かれていましたが、引退して切換えができるということも良いことなのではないかと考えます。部活動を引退して、高校の受験勉強をしようという切換えも大事になってくると思います。

最後に、部活動では何のためになるか分からずにやっていた練習も少なからずありました。現在の学校生活ではなかなか理不尽な経験をさせない中で、部活動は理不尽な経験をする唯一の機会だったと感じています。

個人的な話ではありますが、このような部活動で学んだことを、子どもたちにも学んでほしいという思いがあり、そのために、どのような方針があるのかと考えたときに、先ほどの公設クラブで交流戦を行うということも一案なのではないかと思いました。

【小林委員】

大谷委員と反対の意見になってしまいますが、確かに、上手くいかないことがあった際にどう乗り越えるかという課題解決力は大切ですが、それを学ぶ機会は様々あることと思うので、意図的に理不尽な機会を作る必要はないと私も経験しながら感じているところです。

また地域クラブにおいては、小学生から高校生、その上の世代も含めて、年齢的に縦長の集団で一緒に交流ができるというメリットもあると思っています。場合によっては、保育園や幼稚園の子どもから大学生、その上の青年団に至るまでの異年齢の集団の中で培われる経験は、生きる上でも役立つと思います。また、高校生から青年団ぐらいの年齢で、地域においてお互いに関わり合っているということが、地域への愛着心にも繋がりますし、自分は地域の中で役立つ存在なのだということを、自覚してもらえる効果も期待できると思います。

【鈴木委員】

気を付けなければならないことは、送迎ができないから、お金がかかるからという大人の都合で子どもたちのやりたい気持ちを止めてしまわないようにすることだと思います。

子どもに対して地域の大人が注意することが難しい世の中ではあると思うので、地

域クラブのような集う場所があつて、言葉遣いや行動を注意していただける人がいると、子どものためにもなるし、将来的に繋がることだと思うので、地域の新しい形づくりとして考えていくことが大切だと思います。

一方で、この2、3年間で課題となってきたのが、活動の場所がないということです。体育館や施設が取れない状況も出てきているようなので場所の整備も必要であると考えます。

【早川教育長】

部活動の教育的な意義について何人かの委員の方々から、お話をいただきました。その意義として健康増進や体力競技力の向上、社会性の育成等があり、部活動が地域の様々なクラブ活動等に引き継がれた際に、この教育的な意義をどのように引き継いでいくのかということも大きな問題だと思っています。

まずはその機会を保障すると同時に、活動の中身や質、量をどのように維持していくかということが重要です。

上越市において地域クラブの認定制度や指導者研修を進めている中で、この質と量の担保については、しっかりと子どもたちに保障をしていきたいと思っています。しかし、機会の保障については、地域が広いために全員が同じ環境で地域のクラブ活動に関わることができないことも事実であると思います。

また、平日の部活動の見直しについても、国は6年かけてスクラップすることを示しています。私も最初にスクラップという話をしましたが、土日の部活動はスクラップする方向で進めますが、平日については簡単に進めることができないと考えています。

場合によっては、機会が少ない地域については、学校で活動できる時間を確保するというのも、視野に入れていかなければならないと思いますし、平日のこれからの地域展開を柔軟に考えていく必要があると考えています。

【鈴木委員】

クラブの一員として地域クラブフェアに参加している子どもたちが、次はどうしたら、もっと他の人が興味を持ってくれるかと自分たちなりに考えを持っていました。ぜひ子どもたちも参加するような話し合いの場があれば、より様々な意見が集めることもできると思うので、アンケートを取ることも良いですが、各学校の学校運営協議会に子どもが参加できるような機会があっても良いと思います。

【小林委員】

早川教育長や鈴木委員から子どもたちの意見という話がありましたが、多くの小学校 6 年生の子どもたちは、卒業式で中学校に向けての決意として、部活動のことをあげます。

したがって、この話については、小学生も含めて、地域クラブに入っているか否かに関わらず、子どもたちの声を広く聞き、議論の中に活かしていくべきだと思います。

また、行政としての責任は、地域クラブに地理的な条件や経済的な条件で参加することが難しい子どもたちに、その機会を保障していくことであると思います。

また、地域クラブ活動の全体的な枠組み、安心して取り組めるような制度を作っていくことが行政の役割であると思うため、まずは子どもたちの声を大事にしていくという共通認識を持っていただきたいと思います。

【金子委員】

子どもたちの意見を中心に置くということは、まさにその通りだと思います。

先ほど鈴木委員から、活動場所の確保の問題があげられましたが、指導者についても保護者の中で問題となっています。まず、指導者が見つからないという点が一番にあります。その他に、保護者が指導者を探さなければならない状態となっており、そのような部活動が多々あると聞いています。

そうすると保護者会の役割が、今まで以上にすごく負担になってきており、保護者は自分の子どもたちのことだからと頑張りますが、それにもやはり限界があります。

部活動や地域クラブ活動においては、場所の確保も大切ですし、指導者が誰でも良いというわけではもちろんありません。指導者の確保や指導者の紹介についてもしっかりと話し合う必要があると思います。

【市長】

市として指導者バンクを作るのはいかがでしょうか。

【地域クラブ活動推進室長】

指導者については、指導者データベースを作ることを検討しています。例えば、上越市スポーツ協会や上越 S C ネット（上越総合型スポーツクラブネットワーク）にお声掛けをして、広く周知していただき、指導者として登録していただくという制度を設けたいと思います。しっかりと地域クラブについての理念を共有させていただきながら、クラブと指導者をつなぐという活動をしていきたいと思っています。

【市長】

まだ時間がありますが、事務局から何かありますか。

【地域クラブ活動推進室長】

地域クラブ活動推進室の市川です。

市長、教育長、教育委員の皆様から様々なご意見をいただきました。部活動の地域展開は答えがなく、自治体によって取組は様々です。

また、部活動の教育的な意義は大きく、部活動という概念から離れられないのも現状です。部活動を地域に移行し、ほぼ公設で実施している自治体もあります。小林委員からも話があったように、過去にスポーツ少年団や総合型地域スポーツクラブが上手くいかなかった背景には、部活動が並行して行われていたからなのではないかと考えています。

現在の部活動は、日本の成長期に作った仕組みであり、それが時代と共にうまくいなくなってきた状態であると事務局でも考えているのですが、その大きな時代の変換点に我々がどのような姿勢であるべきかということを常々考えながら、地域展開を進めています。

皆様の意見をいただきながら、取り組んでいきたいと考えております。

ありがとうございました。

【小林委員】

戦後、部活動が始まった頃的话题を 1 つ提供しますと、城北中学校の校長室に大町プランという、城北中学校の前身である大町中学校が昭和 20 年代にスタートした時の教育計画書が残っています。そこに、自由研究の一部として部活動が発足したときの記録が残っており、演劇部、天文部、物理部、家庭科部や調理部など、多種多様な部活動が存在していたことが分かります。それこそ顧問の数が足りないだろうと思われるのですが、全ての部活動に顧問がいるわけではなく、地域の方々が指導者として携わっていたという実態もありました。しかし、徐々に中学校が部活動に力を入れ、地域もフェードアウトしていったという歴史があります。したがって、地域との関わりがあり、子どもたちの多様な個性を伸ばそうとした部活動の始まりの頃を参考にしながら進めると、上手くいくのではないかと期待を持っています。

【市長】

ありがとうございました。時間となりましたので、意見交換を終わらせていただきたいと思います。多くの貴重なご意見をお聞かせいただくことができました。

テーマとなった部活動というのは、子どもの居場所づくりの 1 つの手段です。

先ほど小林委員から、小学校から中学校に上がるときに部活動を頑張りたいという

子どもたちが多いという話がありましたが、子どもたちにとって、初めて自由に選択できる自分の道が、部活動なのではないかと思っています。

したがって、子どもたちの「こういうことをやりたい」という主体性を持った思いを大人が支えていくという姿というのが、おそらく子どもたちにとっては幸せな姿なのではないかと思ひますし、そのような場所ができるように、私たちが努力をしていかなければならないと思っています。

子どもの居場所づくりについては、私たちに与えられた課題だと思いますし、私たち自身が経験してきた部活動をどうやって今の子どもたちに伝えていくかということは難しい課題だと思いますが、多くの人の努力がなければ成り立たないことであると思ひますので、今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

(4) その他

【中川市長】

事務局から何かありますか。

【白石教育部長】

ご協議いただきまして、誠にありがとうございました。

事務局からは特にございません。

【中川市長】

教育委員の皆様から何かございましたらお願いします。

【教育委員】

(特になし)

(5) 閉会

【中川市長】

他にないようですので、本日の協議は終了とさせていただきます。会議の運営にご協力いただきありがとうございました。

今後ともどうかよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

【白石教育部長】

以上を持ちまして、令和6年度第1回上越市総合教育会議を閉会いたします。

ありがとうございました。